

第9回 JACS

Japan
Architectural
Consortium of
Students

全日本学生建築コンソーシアム

住宅設計コンペ 2015

第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

テーマ
「母の家」

～ 身近な高齢者の1人住まいを考える ～

「母の家」は、お母さんがいない人は父の家でもいい。

お父さんもいない人は親戚のおばさんでも、隣のおじさんでもいい。

コレビュジェの「母の家」も実は両親のために設計した「レマン湖畔の小さな家」だったが、要するに、その家の住人を、身近な具体的な人の一人住まいを設定して設計してほしい。

つまり一般化した抽象的な施主を想定するのではなく、その人はほんとうにこの家を喜んでくれるだろうか、持ち物や家財道具は収納できるだろうか、その人はベッドは嫌がるかもしれない、食事は座って食べたがるかもしれない、と具体的な要求にどうこたえるか、それを見せてほしい。

もっともベンチューリのように、他の人だったらたぶんやらせてくれないような奇妙な仕掛けやデザインを、母だからやらせてくれた、というひともいるかもしれない。

それはそれで良い。

そのかわり歴史に残るような「かたち」でなければ、母に気の毒だ。

そして当然母は間もなく老いる。

コレビュジェも「母の家」を建てたころ、他の住宅ではさかんにガラス張りの吹き抜けの部屋を作っていたが、91歳まで住んだ母のためには吹き抜けのアトリエのような部屋はつくらなかった。

つまり、齡をとる母を意識して設計して欲しい。

最優秀賞

ひとりの場所とみんなの場所

近畿大学
工学部建築学科 市場 靖崇

Concept

自分だけの特別な場所。それは誰もが憧れるものだと思う。

葡萄農園を営む私の母はいつも誰かと関わっていて、そんな自分だけの特別な場所を持っていないような気がした。

今までの生活に少しだけ手を加え、特別な場所と変わらない場所を持った新しい「母の家」。

そこは母だけの庭、母だけの景色がある場所、緩やかに流れる時間どこからか聴こえてくる話し声。

誰にも気づかれない母だけの特別な場所。 そこはみんなが立ち寄る場所。

人とおしゃべりをすることが大好きな私の母。 そんな母の明るい人柄にひきつけられるように人々は山を登る前に、山を降りた後にこの場所で足を止めていく。 ひとりになりたいとき、誰かと過ごしたいとき、そのときの気分によって過ごす場所を選ぶ家。

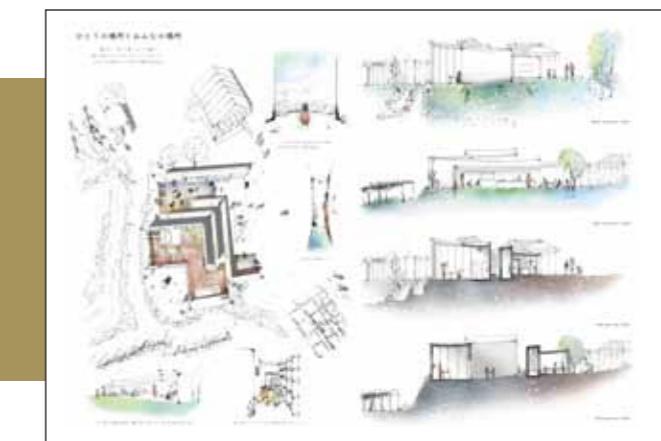
敷地は広島県呉市。

母が営む葡萄農園と道路に挟まれた敷地。

現在は母の葡萄農園で採れた葡萄を売る直売所として使用されている場所である。

登山口の近くに位置していることから、一年を通して多くの人が敷地の前を通っていく。

敷地の周りは、道路の面以外は見渡す限り葡萄農園が広がっている。



第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

優秀賞 「半分トオリニワの家」

京都工芸繊維大学 大学院
工芸科学研究所 建築学専攻 倉知 寛之



Concept

堀越しの庭やガレージが前にある新興住宅が、通り庭を残す家が並ぶ町を侵食する、京都のとある場所に母の実家はある。

通り庭のある実家で母は祖母と暮らし、結婚後ニュータウンの戸建てに引越し、ガーデニングを趣味に主婦をした。離婚後実家に戻り、今は栄養士として働き私と暮らしている。

そんな母の一人住いの要望は、シンプルで明るい家。他にもあるがどれもフツウの要望で、いかにも母らしい。

そんな母の家として「半分トオリニワの家」を提案する。

間口6m半の半分が通り庭のこの家は、路地のようなスケールで町と繋がり、家とイーブンになることで明るい内部を獲得する。

車が入り込み伸縮するトオリニワは、老後、車がなくなれば街を一気に引き込む路地になる。

路地・庭・ガレージ、のような曖昧なスケールの「トオリニワ」は、母の要望を叶えながら、母の記憶、街の形式、ご近所さんと繋がる。

通り庭と家の幅が等しくなることで、私の母の家は出来上がる。

「半分トオリニワの家」

解説文：この模型は、京都市内にある新興住宅街で、通り庭を残す家が並ぶ町を侵食する、京都のとある場所に母の実家がある。通り庭のある実家で母は祖母と暮らし、結婚後ニュータウンの戸建てに引越し、ガーデニングを趣味に主婦をした。離婚後実家に戻り、今は栄養士として働き私と暮らしている。そんな母の一人住いの要望は、シンプルで明るい家。他にもあるがどれもフツウの要望で、いかにも母らしい。

そんな母の家として「半分トオリニワの家」を提案する。

間口6m半の半分が通り庭のこの家は、路地のようなスケールで町と繋がり、家とイーブンになることで明るい内部を獲得する。トオリニワは、老後、車がなくなれば街を一気に引き込む路地になる。

解説文：模型は、通り庭と家の幅が等しくなることで、私の母の家は出来上がる。

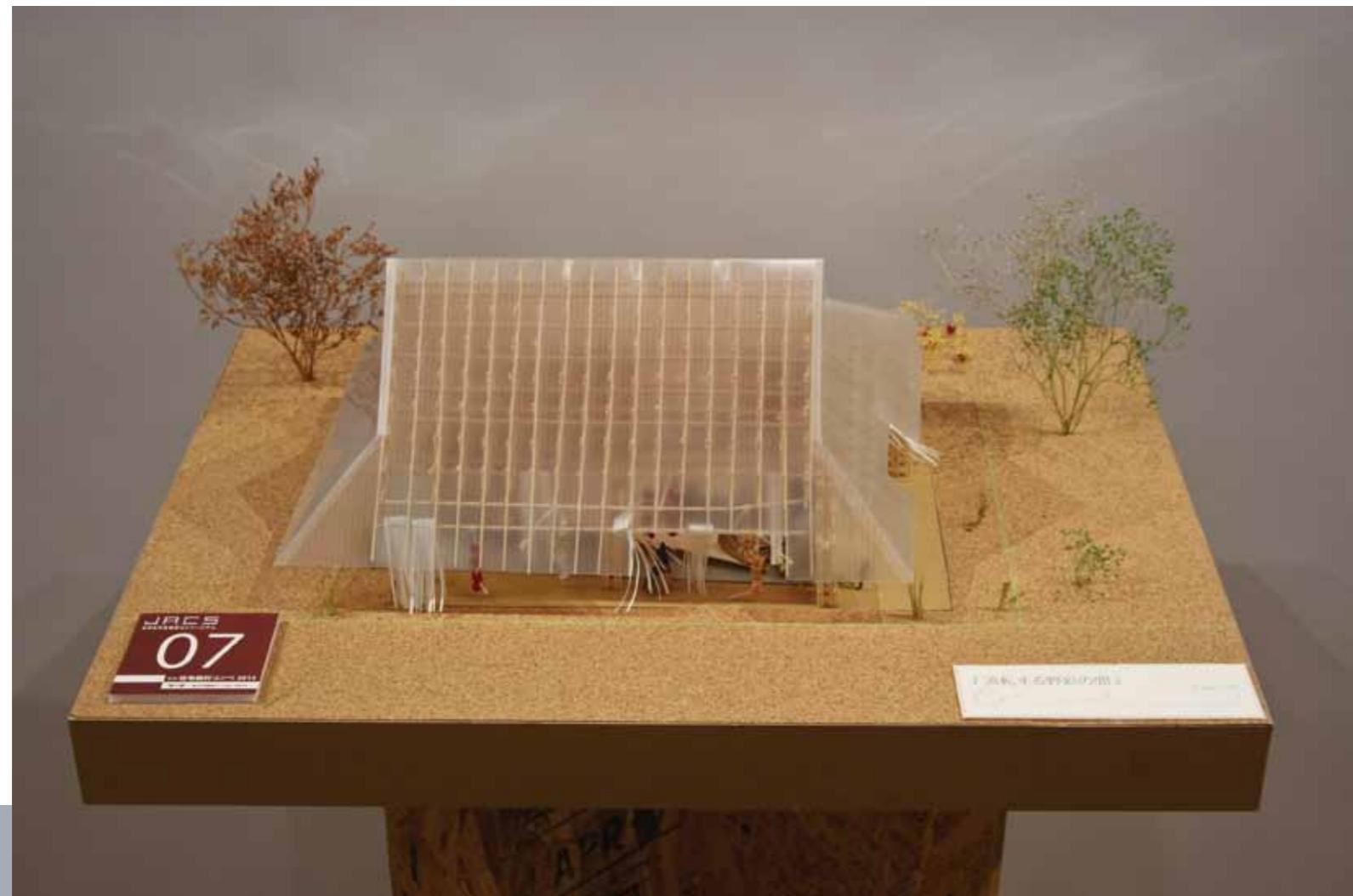
1. 1階の玄関
2. 2階の浴室
3. 3階の展望
4. 4階室-半分トオリニワの家
5. 5階を眺める



第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

優秀賞 母に贈る野彩の間

滋賀県立大学 大学院
環境科学部 環境建築デザイン学科 平郡 元貴



Concept

母は毎年かんぴょうや野菜を作っている。趣味でドライフラワーやドライフルーツ、野菜などもよく作っている姿をよく見る。きっと今のままいけば元気ではあるが、年をとるときつと今よりは外出することは少なくなり、季節を感じることも、日常の変化を楽しむことも少なくなるだろう。そんな母の将来を、母の趣味である野菜作りや干し野菜などで彩る空間を提案する。また彩を取り入れることにより周辺の施設や学校から人が集まれたり、互いに行き来できる空間になることも目的とする。



第9回 JAPAN 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

優秀賞 おおきな風呂のある母の家

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻 赤池 伸吉

Concept

お風呂が大好きな母のために、おおきな露天風呂のある母の家を設計する。
私の母（現在55歳）は毎週銭湯に行くほどお風呂が好きである。

家で風呂に入るときも必ず1時間以上入る。

そんな母に、どんな家に住みたいかと尋ねたところ、

1：おおきな露天風呂

2：いま住んでいる場所の近いところ

3：明るくおおきな部屋

がほしいと言っていた。この3つを設計のキーワードとする。

敷地は東京都の墨田区立川という場所である。現在母が住んでいる家のすぐ近くである。

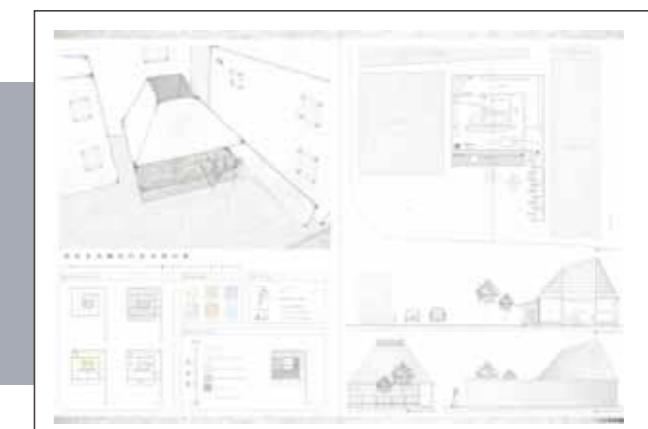
友達やご近所づきあいも多く、この街を離れることは考えられないと母はいう。

この家では家の中心の露天風呂に渦巻くように生活が展開する。

中心から降り注ぐ光は、明るくダイナミックな空間となる。

南に大きく開いたLDKは公園と連続して走り回る近所の子供たちを眺めたりもできる。

母には歳をとっても、お風呂に入って毎日たのしく元気でいてほしい。



第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

特別賞 吉田賞 趣味が巻き付く家

首都大学東京
都市環境学部 建築都市コース

大浦 佑介



Concept

この住宅は「好きなもので人と繋がる家」。

飛び出た出窓は、展示空間でありコレクターの母が集めたものが町を賑やかす。

それが人々を引きつけ、独り身の母と人が繋がる窓となる。

母は楽しみながら日々展示を変える。

当然母が弱れば展示が変わらなくなる。それはそれで良い。

母が弱っているのを誰かが気づいてくれるかもしれない。

母の活気が建築の外皮にそのまま表れる。そんなこの建築は母そのものである。

周辺には小学校、高校、公園などがある。南へ進むと大通りがあり、その先は商業地域となっており、敷地周辺には多様な人々が生活する。

趣味が巻き付く家

■コンセプト

この住宅は「好きなもので人と繋がる家」。飛び出た出窓は、展示空間でありコレクターの母が集めたものが町を賑やかす。それが人々を引きつけ、独り身の母と人が繋がる窓となる。母は楽しむことで街を賑やかす。自然との接觸によって母が変わらなくなる。それはそれで良い。母が替えてくるものや置かづつくれるものもある。母の趣味が建築の外皮にそのまま表れる。そんなこの建築は母そのものである。

■敷地

周辺には小学校、高校、公園などがある。南へ進むと大通りがあり、その先は商業地域となる。敷地周辺には多様な人々が生活する。

■計画

I house II close LIFE open III open LIFE close IV Hobby public gallery

■構造概要

構造: 木造
敷地面積: 150 m²
延べ床面積: 103 m² (角地により 10%縮尺)

■特徴

趣味が巻き付くことによって他の開閉窓を開める
主な生活機能を複数に分ける
出窓が展示空間になり、人と繋がる窓となる

半分トオリニワの家

スケッチ、断面図、平面図、構造図、内装写真等の資料が表示されています。

第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

特別賞 高橋賞 生活を纏う家

東京大学 大学院
工学研究科建築学専攻 加藤 将人



Concept

少子高齢化が進む現代において、高齢者の一人暮らしは重要で切迫した問題である。 “孤独死”という単語を聞くことも多くなった。行動の範囲がさほど広くない老人達の状態を家の外から覗くのはとても難しいのだ。しかし、住む人のふるまいが外に表し出す場所がある。それは窓だ。

そこで今回の設計では”窓”を老いる母の”生活”的一部として取り込み、窓の多い立面に母の生活を表象させる。

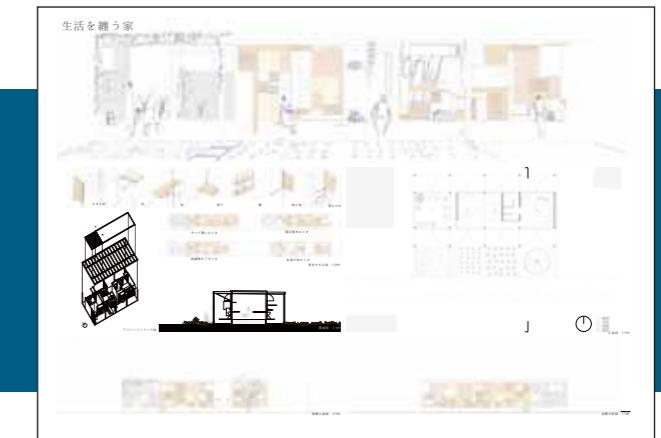
敷地は愛知県稻沢市祖父江町にあるかつて曾祖父の家が建っていた場所だ。稻沢市は全国の郊外都市と同じように少子高齢化に頭を抱える町である。

敷地の近くに姉夫婦が住んでいることから、敷地をこの場所に決定した。

生活を纏う家。母の体調や気分、招く友人の数や彼らの好きな食べ物。

季節や時間の移ろい、老いることによってもこの家の窓の開かれ方は変わってくる。

一人で住んでいると中の様子が分かりにくい母に代わって、この家はその様子を細かく伝えてくれる。



第9回 全日本学生建築コンソーシアム
住宅設計コンペ 2015

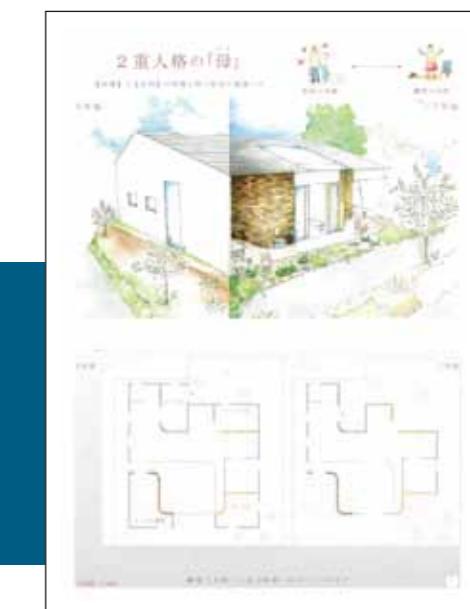
日本大学 大学院
理工学研究科 海洋建築工学専攻

遠洞 躍斗・滝村 菜香・小貫 笑美依・佐々木 秀人

特別賞 長谷川賞 いえ
2重人格の「母」

Concept

【母親】と【女性】の性格を持つ住宅の提案。
生活【母親】の濃度によって住宅が着替えます。
趣味【女性】のファサード。
生活【母親】の中心。



佳作 (23点・順不同)



生家

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻

内田 健太

生きている家を母に贈りたい。
寂寥な家の声に耳を傾ければ、そつと自ら語りかけてくれる。
「気持ちのいい光が入ってきてるよ。」
「ちょっと腰掛けいきなよ。」
「なにかここに置物を並べて欲しいな。」
そんな小さな仕掛けを、小さな家に詰めました。
静かで豊かな家を、母のために贈ります。



まちと繋がる螺旋屋根

大阪工業大学 大学院
工学研究科 空間デザイン専攻

中原 大貴

おしゃべりな私の母が一人で暮らす住宅を考えるうえで、豊かな暮らしとは「一人で暮らさないこと」であると考えました。
つまりいつもご近所さんと雑談したり食事したりできる空間こそが、私の母の家には必要だと考え、大きなキッチン・テーブルも持った住宅を設計します。

敷地は大阪堺市にある閑静な住宅街の角地で、近くには小さな畠などがあり緑豊かな場所です。

母にとって豊かな暮らしを一枚の屋根によって構成することで、あくまで普段の生活の延長としていつも誰かと繋がり合える住宅を設計しました。



本が介在する家

前橋工科大学
工学部 建築学科

土田 梢

母は、20年間多くの学校の図書館で司書の仕事に就き、人と本を介することが多かった。私自身も小さい頃からやいどうほど本を勧められた。自分と人の間には常に本があったというのが母である。今回、本というものをなかだちとして人や記憶につながる母の家を提案する。

計画地は群馬県前橋市。西側には利根川が流れ、隣接する建物が少なく自然豊かである。

母が働く間は、家から読みたい本を持っていき、書棚にストックしていく。

仕事を辞して移住後、ストックした本を近隣の人々に貸したり読みなくなつた本を譲る。

母は、いずれ亡くなり、その後も書棚に母の大切な本が残る。思い出が本というカタチで未来に継られていきます。



三角屋根の暗がりで

工学院大学 大学院
工学科研究科 建築学専攻

大枝 岳・崎山 涼

幼い頃のぼくは、かつて母にこう尋ねた。「お母さんは目が見えないので、どうして自由に動けるの?」「かすかな光を頼りに行動できるのよ、家中ならね」とんな彼女、盲目の母のための家。

敷地は東京郊外の住宅地、家族は離れて暮らす息子が1人、日々の楽しみはガーデニングとティータイム。

三角屋根の暗がりで、庭に面した開口から取り込まれる草花の香りやほのかな光を感じる。自由に行動できるようプランは明快に、収納は低いところにわかりやすく。

三角屋根の暗がりに、デッキから足音が室内にコツコツと反響する。

それは昼食を届けに来るお弁当屋さんや、お茶会に来るご近所さんの訪れを知らせる。

三角屋根の暗がりは、たまに様子見にやってくる息子に、母の研ぎ澄まされた身体的感覚を共有する。母が地域の輪に加わりながら、心豊かに暮らしていくための「かたち」を提案する。



自然に／と暮らす

東京藝術大学 大学院
美術研究科建築専攻

早稲田大学 大学院
建築学科

藤巻 佐有梨・佐藤 広章

私の母は生まれ育ったこの山梨で余生を過ごすことを決めた。三姉妹が成人し実家を出た今、母が暮らしに求めることは便利さでも人間関係の充満感でもなく「自然」であった。ここで示す「自然」とは次の2つの意味においてである。

1. 「自然に」暮らす—母の身体の大きさ、母のクセ、日々の習慣などに合わせて、不自然なく暮らすということ。

2. 「自然と」暮らす—1日の太陽の動き、家を囲む自然の風景に寄り添って暮らすということ。

敷地は山梨県甲斐市、山の傾斜地上に面した住宅地である。

配置計画として、勾配と直交する向きに配することで傾斜を受け止めつつ、もっとも大きな開口部を富士山の方角へ向けた。内部のモジュールは母が自然に暮らせるよう配慮し、開口部による風景の切り取り、煙突による太陽からの採光を図った。田舎での生活であっても孤立することなく、自然環境に溶け込み穏やかに暮らすことを望む。



灯台の家

近畿大学
工学部建築学科

渡邊 文彦

働く父の住みやすい空間とは何か。退職した父はそこで何をするだろうか。愛媛県は海に囲まれ魚介類に恵まれた地域だ。父はそこで漁師をしている。父の父も漁師をしている。若いときから父は祖父を手伝い継いできた。

父ももう30年以上働いている。

事故で海に落ちたりすることもあった。

定年退職のない漁師は体次第で働き続けられる。

そんな父が仕事をやめるというのはどういうことなのか。やめた後父はどうするのか。

父は漁師をやめた後海の様子が気になるのではないか。

また、自分のような事故をする人がいるのではないか。

できるだけ遠くに光を届けたいのではないか。

そういう父の思いが様々な角度で発生する家が生まれる。

佳作 (23点・順不同)



野菜と暮らすイエ

関西大学
環境都市工学部
江種 航

この家の主は家庭菜園である。父が単身赴任、僕と妹が地元を離れた今、我が子のように大事にしている家庭菜園とそれを世話する母のための家。母は四六時中、野菜たちと向き合い、新しい一面を見つけて、愛でる生活をする。家族は出て行ってしまったが今は新しい家族の世話を楽しんでいるようだ。世話好きで近所づきあいもよい母だからこそできる家。



ベジタ風呂～野菜とお風呂と父の家～

近畿大学
工学部建築学科
渋本 真之

私の父には唯一と言つていい趣味がある。それは家庭農園だ。今はもう会社を辞め、毎日くたくたになりながらも楽しそうに帰ってくる。そして、鼻歌交じりに大好きなお風呂で疲れを癒している。これはそんな父のための家である。いつも父は早起きし朝から野菜の面倒を見るため畑を耕しに出て行く、そして夜になるとお腹を空かして帰ってくる。しかし、いくら父といえど年齢を重ねるにつれて行動する範囲も狭まり、体力も落ちていく。いつかは今の少し離れたところにある大きな畑も面倒を見きれなくなってくるだろう。たとえ、畑を手放したとしても父には趣味に打ち込んでほしい。もっと身近に家庭農園ができる場所はないだろうか。

敷地は周りが住宅に囲まれており、家の前には車道がある。周囲に高層ビルやマンションはなく低い瓦屋根の住宅が立ち並ぶ方田舎。普段は静かでご近所づきあいもほどほどにあり、昼を過ぎると子供たちの遊び声と主婦たちの井戸端会議が聞こえてくる。道路に面し、住宅に囲まれた敷地は人の気配をよく感じる。



境界の家

首都大学東京 大学院
都市環境科学研究所
林 拓弥



深度を展開するイエ

佐賀大学 大学院
都市工学専攻
内田 大資

□私の母 私の祖母は九州の土間をもつ民家で暮らす。母はそこで生まれ、育った。今、母は庭で花や草木を育てることを愉しみに郊外の戸建て住宅で暮らしている。
母はキッチンで料理をしているかと思うと、庭で花に水をあげている、かと思うと部屋で裁縫をしている。忙しく動き回る人だ。
□場所 敷地は重要伝統的建造物群保存地区を有する大分県日田市豆田町を対象敷地とする。対象地周辺の民家は多種多様な形の土間を有する。調査によって場所が継承してきた型を見いたした。このような歴史のタイポロジーにこそ新しい建築のきっかけがあると考える。
□空間 蛇行するドマ空間に諸室が貫入する形態操作をおこなった。ドマ空間・諸室・二ワ空間が連続的に展開することで155 mという比較的小な敷地をも深化させる。これによって空間は「深度」を持ち、その空間を展開する家となる。
私はドマ空間を用いた新たな建築を考えたい、土間空間にじみのある母であれば受け入れてくれるのではなかろうか、この家の空間は母の性分に合うのではないだろうか。



おふくろのふところ - 母の小さな胸中に向けて-

日本大学 大学院
理工学研究科
志萱 侑太

対象敷地は埼玉県に位置する大宮。そこは、親子の行き来が多い地下トンネルと車通りの少ない道に隣接する場所。大宮に住んでいる母は幼稚園の先生であった。
母のふところ(胸中)にはまた先生になりたいという思いがあるようだ…
そんな母の要求はふたつ。ひとつは、今まで同様に個室がない暮らしを。
そして、余った空間で第二の幼稚園をひらくこと。
それも、敷地周辺には幼稚園が多く、同じマンションに住んでいる同級生でも間わりがないことはよくあることであり、小さな問題もあるからだ。
敷地いっぱいのリビングに子供たちが遊んでくれていることは母にとっての幸せ。
子供が集まれば親も集まる。奥様方も見守られながら生活を送る。
そうして母と家は歳をとり、深みが増していく。
ふところと共に深くなった母の家にはたくさん子供から大人までに囲まれる。
そう。ここが広く、包容力のある母と家になることを私は望む。ふところが深い家を母へ。

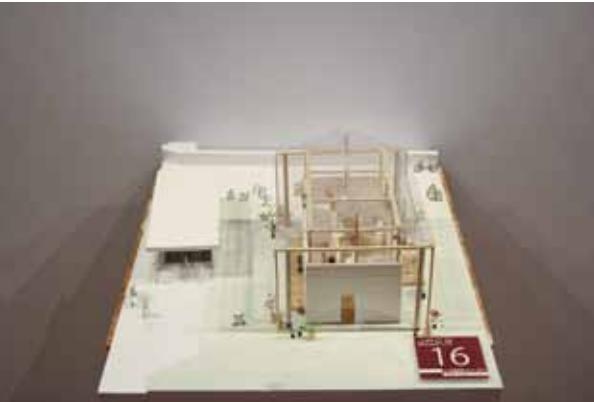


ひとつながりの家

関西大学 大学院
理工学研究科 環境都市工学専攻 建築学分野
奥野 智士

私の母は外に近い所にお気に入りの場所をもつ。家の中に入ってくる光や風、音が心地いいのだと言う。そこで、いつでも外を感じられる住宅を提案する。
敷地は母が人生の多くの歩みを過ごしてきた都市近郊の住宅地。この場所は、生産緑地指定を受けた農地や雑木林が点在している。母はこの自然が混じる環境が好きであった。しかし、それぞれの環境が孤立している為、絆関係にある。囲い込みによって内と外、外と外の関係性を構築する。敷地のコンテクストに従い、内部と外部の空間を等価に囲い込み、交差させる。すると、たくさんの「間の空間」が生まれる。それ自体は主張することなく、屋外の環境を受け止め、内部からにじみ出した生活と混じり合いながら、街へと流れ出る。
母の生活行為によって、あらゆる環境とひとつながりの関係性をもつようになり、地縁的な近隣意識が芽生え始める。
そして、この地に住まうことの喜びをいろいろな人、環境と共に分かち合う。

佳作 (23点・順不同)



服を着た家 ~コミュニケーション嫌いで寂しがり屋の母の家~

千葉工業大学 大学院
工学研究科 建築都市環境学専攻 江尻 大輔

私は、敷地の選定として郊外、ベットタウンである、埼玉県久喜市南栗橋を選定しました。そして私の母を住居人として設定します。この地は私の生まれの故郷でもあり、25年間母と過ごした地でもあります。敷地周辺は線路下をくぐるアンダーバス、線路などがあり小学生、中学生の帰り道になっています。ここで私は他人とのコミュニケーションをあまり好まない目つ寂しがりやの母に、全体的に閉じた家を提案します。外壁のアーチ部分からは外の風が通り小学生の帰る声が聞こえ、休日には母の息子が孫を連れて半外部屋根裏でバーベキューをします。静かで暖かい家になるように望みます。



ひとりになれない一人暮らし —バス停×住宅—

兵庫県立大学 大学院
環境人間学部 環境人間学研究科 長和 麗美

高齢者は住宅に引きこもり「ひとりぼっち」になっている。この問題に対して、引きこもることができない住宅を提案する。引きこもることができない住宅とは「ひとりになれない住宅である、「ひとりぼっち」になりたくないで引きこもっているわけではない。「ひとり」で気軽に過ごしたいだけではないか?他者がいても「ひとり」で気軽に過ごせれば、住宅内に他者がない問題はないのではないか?大勢の人が「ひとり」で気軽に過ごす空間に母の住宅を埋め込み、「ひとりぼっち」にならずに「ひとり」で過ごせる住宅を提案する。ここでは「ひとり」で気軽に過ごす空間としてバス停に着目し、母の住む山口県周防大島のバスの終着点に母の家を計画する。バス停の中に母の生活に最小限必要な設備とベットを2つのユニットに分けて配置する。2つのユニットの間の空間を庭は待合の一部、夜は住宅の一部として使うことで大勢の人がひとりで気軽に過ごすことのできる空間に母の住宅を埋め込むことができる。



大きい広場と小さい庭 —気ままに暮らす母の家—

大阪市立大学 大学院
工学研究科 都市系専攻 上田 満盛

灌水するのが好きな母、庭の紫陽花を大切に育てる母、小学校で算数を教える母、運動はあまりしない母、けれど自転車は好きな母、せっかちでよく喋る母、ざくばらんで面倒見のいい母。私はそんな母に、大きい広場と小さい庭の2つの外部空間を持つ家を設計する。大きな広場は道とシームレスに繋がるように設ける。そこは母の家と周辺の各戸や道に面する、都市的な母とまちの空間。そこでは母が元気な内は街の子供にまた算数を教えることもできるし、まちの人たちと食事もできるし、猫も入ってくる空間。一方、家とブロック塀に囲まれた路地のような小さな庭は母のためだけの庭である。そこには、母の大切にする紫陽花や小さなベンチ、物干竿がある。大きな広場とは対象的に静かで落ち着いた一人を楽しむ空間。母が年をとる中で在り方が変わる大きな広場と、変わらない小さな庭。母はこの家とまちでどのように住まうのでしょうか。



夜の家

日本大学 生産工学部 建築工学科 高橋 祐太

私の母が朝が早い。朝一番に起き、みんなの食事を作る。食事の後は片付け、清掃。そして、休む間もなく仕事に向かう。夜も食事を作り、片付ける。次の日の朝に備えて早めにお風呂に入り、床に就く。一人暮らしになると家族のための家事がなくなり、時間ができる。そして、早起きがなくなった分夜の時間を今までより長く過ごせるようになる。趣味をする時間、ボートする時間、読書をする時間。昼間忙しい母は、夜がそんな時間になるのではないか。だから、私は母のために夜を楽しむ家を考える。夜になると空に星が輝く。昔はよく見ていた夜空もだんだん見る機会が少なくなっている。青空はない、静かな魅力はある夜空が、疲れた母の心を癒す。夜空と暮らしを結ぶのは屋根である。屋根がメインとなり、夜空と暮らしを一体となる住宅を考えた。母は夜空に住まい、夜の静かな時間を楽しむ。夜空を感じながら過ごす母の生活はきっと輝くだろう。



空の器

日本大学 大学院
生産工学研究科 建築工学科 今村 昂広

ひとり住まいとなった私の母の住宅である。対角線状には子ども夫婦が住む住宅を合わせて系アツクした。母の住宅を計画するにあたり、2つの住宅を計画する必要があると感じたからである。母は子の存在により自らを認識し、両者の間には共有する意識のようないいに影響を受けるものが存在している。対角線状に方形の母と子の住宅を配置した。正方形平面の単純なかたちに対し、欠けた空間を存在させ、向き合う角が欠けたところから方形の角にむけて稜線を延ばした。住宅と対をなす広場の光が住宅内に入り込む。光というよりは光の粒子と呼ぶ方がいいのかもしれない。天井の稜線は陰をつくる。欠けた空間は2つの広場をつくり、屋根の稜線を決定付け住宅内に光の満ちる部分と陰影のある場をつくる。欠けた空間を見上げれば光り輝く空、あるいは漆黒の空のみが広がっている。この住宅は母と子、両者の関係において成立している。私はこの住宅を空の器と名付けた。



母の道

千葉工業大学 工学部 川合 豊

この家は、家族にそそいできた優しさ・愛情を今度は母に与えてあげるそんな母の家。家の内側に生活の密度を色濃く与える多様な居場所の連鎖。母の気配を感じるような「気くばり」する仕掛けが組み込まれている。また、母を想い、そして、母の大切なヒトやモノも大切にする。母の長期的な変化を受け入れる寛容な器でもあってほしい。そんな「カタチ」の提案。

佳作 (23点・順不同)



やわらかなカーテンウォールの家

日本大学 大学院
建築学科 齊藤 佑樹



はは
家族の家

東京理科大学 大学院 理工学研究科 建築学専攻
林山 超大・森島 英子・宮坂 岳見

今思えば家族4人で暮らしていた4LDKのマンションに“母の部屋”はなかったと思う。しかし母は家の全てを把握し誰よりも家を使いこなし、まるで家全てが“母の部屋”的であった。今、母はこの家に一人で暮らしている。2年前に父が急死し、私と弟は県外の大学に進学した。久しぶりに訪れた家は昔と同じ家具の設えで、机にペンを並べる私の癖や本棚におかれた父の煙草など、それぞれの生活の痕跡がそのまま残されていた。敷地は母のPTA時代のコミュニティが残る、仙台市内の小学校の近辺とする。この家に母の部屋はない。亡き父や稀に帰省する兄弟のための部屋があり、昔から使っている家具が置かれている。陽の当たる私の部屋で友達とお茶をしたり、弟の部屋で本を読んだり、奥まった父の部屋から彼の気配を感じたり。母は時間や季節に応じて家族の部屋を横断し暮らしていく。家具に残された記憶の上に母の生活が上書きされ、母は家を更新していく。



母に呼応する家
秋山 恰央

千葉工業大学 大学院
工学研究科 建築都市環境学専攻
母は毎日植物の世話をす。それが今の母の生き甲斐になっている。
そんな母の日常を少しだけ豊かにしたい。
森の隅から隅までを歩き回るようにして生活する細長い家。
建築に付属したような植物を見て母は喜ばない。
まず自然があり、そこに寄り添うような母の家を考えるうそすることで、建築が自然に対して最も弱い形で存在することが出来るのではないかだろうか...
母はもうすぐ定年をむかえ、毎日同じ日常を送る。
朝目覚めると朝食をつくり、布団を干し、植物に水をやり、本を読み、テレビを見て、風呂に入る。そんな日常生活の中に、その日行ってみないとわからないような場所を散りばめる。母の行動が、常に植物と、結びつく関係。そして、母が残してくれたものは生き続ける。



雲のように過ごす ~天気によって居場所が移り変わる家~

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻 井上 慧祐

“晴耕雨読”という言葉があります。
天気に左右されながら悠々自適に生活する様を鮮やかに言い表す言葉です。
毎日変化していく身近な自然は天気です。
気まぐれな天気が生活のリズムを作り出す母の家を提案します。



大皿の家
遠田 拓也・山下 大樹

東北大学 大学院
工学研究科都市建築学専攻
人の為に生きてきた「おつかあ」という人物がいた。そんな「おつかあ」に育てられた人が、私の祖母である。祖母は「おつかあ」が仕えた、長崎の深堀城の屋敷の跡地で、日課の畑仕事をしている。人の為に野菜を作り、人の為に時間を割き、自分で後回しにする祖母。今日ではバラバラとなった親戚を含む、たくさんの人達が共に暮らしていた屋敷で、以前のように皆で集う事を望む祖母。僕は、残された時間を祖母が望む事で埋め尽くしたい。
だから、皆で暮らした思い出の地に、祖母の居場所と皆の居場所と畠を詰め込んだ。大好きなもので溢れた大家族の食卓に並ぶ「大皿」のような祖母の家を計画する。皿は皆を受け止め、土壁と土屋根は環境と呼応し、身長800mmという祖母の小さな体に合わせたスケールは、弱った体を受け止める。祖母の日常が、周りの皆や環境と補完し合って生きていく毎日に変わり始める。

第9回 全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2015

募集内容

テーマにそった建築アイデア

【テーマ】 「母の家」～身近な高齢者の1人住まいを考える～

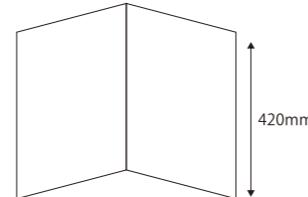
- 【敷地概要】
- 各自で160平米以内の適当な敷地を設定する。
(どういうところかはA4サイズの「説明書」の中で説明する。)
 - 用途地域: 第一種住居地域
 - 建蔽率: 60% (角地の場合、法規定を満たせば10%の緩和あり)
 - 容積率: 80%
 - 壁面後退制限なし

- 【建築概要】
- 構造自由(今日の普通の工務店で施工できるもの)
 - 平屋とする(地下室なし)

提出物

- 【1次応募規定】
- 用紙: A2サイズ1枚、表面(1面)のみ使用。

横使いとし、これを図のように二つ折りして、
丸めないで提出して下さい。
平面図は北方向を上。(方角の傾きは考慮しない)
図面の位置、レイアウトは自由。
ケント紙程度の紙でパネル化は不可。



※A2用紙の中の文章は極力避ける。どうしても必要なときは、20文字以内で、3箇所までとする。

- 図面: 平面図: 100分の1、配置図兼ねる
立面図: 100分の1、2面以上
断面図: 自由(必要な場合のみ2面以内、100分の1)
パース: 1面以上、内外観自由(模型写真も可)

- 設計主旨及び計画の説明
: A4用紙1枚(表のみ1面)に400文字以内。図を描くことは自由。

- 【2次応募規定】
- 模型: A2サイズの重くない台(木製パネルなど)に1/50の模型を作ること。
(1次合格者のみ)
高さは20cm以内。材質は自由だが、全体重量が1kgを超えないこと。

垂直に掛けて審査、展示するので横にしても壊れないように注意すること。(模型にフックなどの配慮は不要)

参加方法

公式ホームページよりエントリー後、下記提出先へ「提出物」を送付 URL <http://www.jacs.cc>

参加資格

○2015年4月1日現在在学中の学生(大学・専門学校・短大・大学院他)

参加費

無し

提出先

- 1次
- 書類郵送先: JACS新潟事務局 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 (株)ステーツ内
「2015設計コンペ係」宛 tel.025-257-1116
 - 書類データ送信先: compe@states.co.jp
 - 郵送書類をデータ化(pdf, もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダ(エントリー番号)にまとめ圧縮して送信

- 2次
- 模型郵送先: JACS新潟事務局 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 (株)ステーツ内
「2015設計コンペ係」宛 tel.025-257-1116



審査員: 吉田 研介／高橋 晶子／長谷川 豪

Kensuke Yoshida
吉田研介建築設計室

Akiko Takahashi
ワークステーション
武蔵野美術大学教授

Go Hasegawa
長谷川豪建築設計事務所

ホームページのみ
エントリー締切 2015年07月31日(金) PM5:00まで

1次応募締切 2015年08月04日(火) 必着 PM5:00まで

1次審査・発表 2015年08月11日(火) 予定

非公開 1次審査合格者にメールで通知。後日ホームページ上にて発表。
2次審査の準備をお願いいたします。

2次応募締切 2015年10月07日(水) 必着 PM5:00まで

2次審査・講評会 2015年10月17日(土) 会場: 日本建築学会ギャラリー
詳細については1次審査合格者にメールにて通知。

作品展示 2015年10月17日(土)~18日(日)
※17日午前は審査のため、非公開となります。

●最優秀賞(2点) 賞金 50万円

●優秀賞(3点) 賞金 10万円

●佳作(25点) 賞金 2万円
(ただし模型提出者に限る)

※1次審査を通過し、2次審査にエントリーした作品全てを入選とする。

注意事項

- 1グループにつき応募作品は1点とする。
- 他の著作権に触れる画像、文書などの使用は認めません。
- 雑誌、書籍、ホームページからの無断借用も認めません。
- 2次審査提出模型は審査終了後、返却いたします。
その他の出品品は一切返却いたしません。必要な場合はあらかじめ各自で複写しておいてください。
- 本コンペの応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入賞作品及び入選作品の発表に関する権利は主催者が保有します。
- 入賞後の応募者による応募内容の変更是認めません。
- 入選入賞後に、著作権侵害などの疑義が発覚した場合、これを取り消します。
- 応募作品にて著作権侵害などが発覚した場合、全ての責任は応募者が負うものとなります。
- 審査の結果については、何人も異議の申し立てをすることは出来ません。

事務局

全日本学生建築コンソーシアム 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 (株)ステーツ内
mail to info@jacs.cc 担当: 山本(ヤマモト)、深澤(カサワ)

※応募に際して主催者側が取得した個人情報並びに提出物は、当コンペのみに使用されるものであり、
その目的の範囲を超えて個人情報を利用する場合、事前に応募者にその目的を通知し、承諾を受けて行うものとする。